

青
あおおに
鬼

ゾンビだらけの遊園地

ノプロフス
noprops / 原作

くろだけんじ
黒田研二 / 著

すずらぎ
鈴羅木かりん / イラスト

卓郎

東部小学校の五年生。頭の回転が早く、決断力と行動力がある。頼れる存在。

ひろし

北部小学校の五年生。小学生とは思えない、洞察力と知識がある。なぜ解きが得意。

たけし

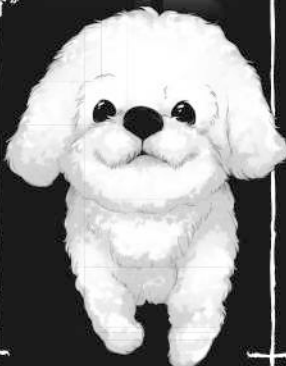
南部小学校の五年生。お調子者で臆病。でも、誰よりも友達思いのイイヤツ。

タケル

ビション・フリーゼという種類の犬。大切な人たちを助けるために、青鬼と勇敢にたたかった。人間の言葉をすべて理解しているが、バレると面倒なので秘密にしている。お笑い番組を観るのが好き。

美香

東部小学校の五年生。幼なじみの卓郎と、いつも一緒にいる。運動神経バツグン。



怪物

ブルーベリー色の巨人。人間を見ると襲いかかってくる。ひろしたちは、自分たちが住む街の外れにある洋館「ジェイルハウス」と、今は廃校になっている「碧奥小学校」さらに、「碧奥医院」と青島、通称「ドクロ島」でこの怪物に出会っているが、どうやって生まれたのか、どこからやって来たのか、すべてがなぞに包まれている。どうやら犬は苦手らしい……。

ナオ

北部小学校の五年生。ひろしのクラスメイトで、クロさんとは伯父・姪の関係。



ハルナ先生

ひろしが通う北部小学校の教師。イケメンと、動物などのカワイイものに目がない。生徒たちが多数失踪し、閉鎖されることになった碧奥小学校の元・生徒でもある。クロさんの本性を知らず、クロさんに片想いをしている。



クロさん

ネイチャーガイド。卓郎と美香が通う東部小学校の課外授業で、ガイドをしていたことをきっかけに、ひろしたちと知り合う。



目次

1	お風呂場の難問	006
2	恋の予感	014
3	まんぷく食堂にて	027
4	呪われた遊園地	040
5	衝撃の映像	049
6	ハルナ先生からのSOS	062
7	ハルナ先生を救え!	071
8	夜の遊園地	081
9	ゾンビの館	091
10	レストランの大男	101
11	ごちそうは誰のもの?	110

12	ブルースターを探せ	120
13	困惑のミラーハウス	129
14	なぞのメッセーシ	139
15	せまりくる青い影	149
16	ジェットコースターの攻防	158
17	観覧車からの捜索	166
18	ウォーターズライダーの冒険	174
19	二十年前の出来事	186
20	夜明け前	195
21	ゾンビだらけの遊園地	203
	ひろしによるなぞの解説	222

あらすじ

なつやす あいだ ち え ゆうき なんと き
夏休みの間、知恵と勇気で何度もピンチを切りぬけてきた、
ぼく——タケル。いっしょ ば もの た む くん
一緒に化け物に立ち向かったひろし君、
たけし くん たくろう くん み か なかま
たけし君、卓郎君、美香ちゃんとはすっかり「仲間」って
かん に がっ き はい きょう くん さそ
感じた。二学期に入っすぐの今日は、たけし君の誘いで
「まんぶく しょくどう あつ どう じけん
「まんぶく食堂」に集まっている。ドクロ島の事件をきっかけに知り合ったナオちゃんも来てくれたんだけど……。
ナオちゃんのおじ ぼく にく あ
ナオちゃんのお伯父であり、僕たちをずっと憎んでいたと明か
したクロさんのゆくえは、いまだにわからないままだ。いったい
どこにいるんだろう？ なんだか、いや よかん
嫌な予感がする——。

3 まんぷく食堂にて

「それからどうなったの？」

美香ちゃんがつねる。

「それから……とは？」

ひろし君は小さく首をかたむけた。

美香ちゃんのとりに座ったナオちゃんも目を輝かせている。

女の子は恋の話が大好きだ。それは犬の世界も人間の世界も同じだった。

「爬虫類も昆虫も、それほどもぐずらしいものは置いてありませんでした。スラウエシオオヒラタ

のオスとメスがペアで売られていたくらいでしようか」

ひろし君が淡々と答える。

「だれもそんなことはきいてないってば。ハルナ先生の彼氏とは会ったの？」

「いえ。待ち合わせは別の場所でしたので」

「どうしてついていかなかったわけ？」

「ついでいく必要がありましたか？」

「当たり前じゃない。ハルナ先生の彼氏がどんな人なのか知りたいでしょう？」

「いいえ。まったく興味がありません」

ひろし君の返答に、美香ちゃんは落胆の表情を示した。

「美香、仕方ないだろ。ひろしはそういうヤツなんだから」

すでにチャーハンを食べ終え、カウンター横のテレビをながめていた卓郎君が口をはさむ。

ぼくはひろし君の足もとで、細かく刻まれた鶏肉を食べながら、みんなの会話を耳をかたむけた。

今すぐうちの店へ来てくれ、とたけし君から連絡が入ったのは、ぼくとひろし君がペットショップから帰宅した午後四時前のことだった。

リビングの床に転がっていた電話機が赤く点滅していたので、いつもそうするようにぼくが〈留守録〉のボタンをおすと、たけし君の声が流れ出した。

——よお、ひろし。自宅に電話をしたら、タケルんとこにいるって話だったから、こつちへ電話したんだけど、どこ行つたんだ？ 夏休みの宿題を手伝ってもらったお礼がしたいからさ、こ

れから〈まんぷく食堂〉まで来てもらえないかな？ みんなもう集まつてるぞ。急いで来てくれよな。

たけし君のお礼といえ、あれしかない。たけし君が絶品とほめたたえる〈まんぷく食堂〉の一番人気メニュー——特製チャーハンだ。ついさっきジャッキーを食べたばかりだというのに、お腹がぐうと音を立てた。

いいなあ、うらやましいなあ。

ねたましげにひろし君を見上げる。

ぼくも砂浜で貝を拾うのを手伝ったり、宿題のノートが飛んでいかなかったように重しになったり、けつこうがんばったんだけどなあ。

——あ。今日は貸し切りにしてるから、タケルも連れてきてくれよ。あいつにもいろいろとお世話になったからな。

さすがたけし君！ ぼくはびよんぴよんととびはねてよろこんだ。思いきり口笛をふきたい気分だ。ふけないけど。

「行きましよう」

ひろし君に抱えられ、再び自転車に乗る。



たけし君の両親が経営するお店——〈まん

ぶく食堂〉には十分ほどで到着した。

店の前には〈休業〉の札がかかっている。

もともとお休みだったのか、ぼくたちのために店を閉めてくれたのかはよくわからない。

ひろし君が引き戸を開けると、いつもの仲間がすでに集まっていた。

ぼくが予想したとおり、みんなはおいしそうにチャーハンを食べている。一週間前のドクロ島の冒険のときに初めて出会ったナオちゃん姿もあった。

「おお、ひろし。どこ行ってたんだよ？ 何度も電話したんだぞ」

たけし君がこちらをふり返る。真っ白なコック服を身に着けていた。

サイズはまるで合っていないが、それなりに様になつてゐる。まるでホンモノの料理人みたいだ。

「すみません。商店街のペットショップへ出かけていたものですから」

テーブル席にこしを落ち着け、ひろし君は答えた。

ぼくはひろし君の足もとにちょこんと座る。

本来、ペットの入店は禁止されているけれど、行儀のよいぼくはたけし君の両親にも気に入られており、特例として認めてもらつていた。

「ちよつと待つてくれ。すぐにごちそうを用意するからな」

そういつて、たけし君は厨房へと引っこんだ。

「ひろし君……ひさしぶりだね」

ひろし君の正面に座つていたナオちゃんが口を開く。ぼくの位置からはよくわからなかつたが、ナオちゃんはなんだかはずかしそうだ。

「ひさしぶりというのは正しくありませんね。いつも学校で顔を合せているわけですから」

ひろし君がそう指摘する。

「だけど、こうやってしゃべるのはひさしぶりじゃない？」

「おまえら、同じクラスなんだろう？　なんだよ、そのよそよそしい態度は」

卓郎君が茶々を入れた。

「だってひろし君、学校では『僕にしやべりかけるな』っていうオーラを出しまくってるんだもん」

ナオちゃんが口をとがらせると、美香ちゃんも顔をしかめた。

「うわあ、なんだか想像できるなあ。どうせ休み時間は教室のすみっこで難しい本とか読んだりしてるんでしょう？　ダメだよ。女の子にはもつとやさしくしてあげなくっちゃ」

「僕はべつに、いつ話しかけてもらってもかまわないのですが……」

「だけど、話しかけづらいんだってば」

「おまえ、なにか考えごとをしているときは、なんだか不機嫌そうな感じに見えるしな」

みんなに責められて、ひろし君が少し気の毒に思えてくる。まあ、本人はなにも気にしていないだろうけれど。

「お待たせ」

厨房からたけし君が顔を出す。ひろし君にはチャーハンが、ぼくには鶏肉が運ばれてきた。この店の鶏肉は格別においしい。

「お待たせ。オレの作ったチャーハンだ」

「え……たけし君の手作りですか？」

ひろし君の顔色がわずかにくもった。

「それって食べられるのでしょうか？」

「当たり前だ。食べられないチャーハンを作つてどうするんだよ？ この日のために特訓したんだぞ」

たけし君がほつぺたをふくらませる。

「ひろし、食べてみるよ。意外といけるから」

卓郎君がいった。その言葉はうそじやない。おいをかげば、おいしい食べ物であることはすぐにわかった。

「たけし君の宿題を手伝っていないナオまでごちそうしてもらつちやつてゴメンなさい」

ナオちゃんが立ち上がつて頭を下げる。

「なにいつてるんだよ。オレたち、ドクロ島でいっしょに戦つた仲間だろ？ ナオちゃんには冬休みの宿題を手伝ってもらうから、そのときはよろしくね」

たけし君のおどけた態度に、みんなは笑い声をあげた。

「では……いただきます」

ひろし君がおそろおそろといった様子で、たけし君の作ったチャーハンを口に運ぶ。

「どうだ？ うまいだろ？」

たけし君が身を乗り出してきいた。

「……おいしいです」

「なんでおまえはいつもそんなに落ち着いてるんだよ？ おいしいなら、もっとおいしいような顔を

をしろつてば」

「先ほど、ペットショップの店員にも同じことをいわれました」

「あ。それって今日オープンしたお店だよね？」

美香ちゃんがお口をはさんだ。美香ちゃんはハートという名前のペルシャ猫を飼っているから、

興味があるのだろう。

「なにかめずらしい動物はいた？」

「これといったものはとくになにも。強いてあげれば、なれなれしい女性店員とひらひらの衣装

を着たハルナ先生がいたくらいでしょうか？」

「ひらひらの衣装のハルナ先生？ なんだそれ？」

卓郎君がたずねる。

「土星のペンダントをおそろいで買った相手と、これからデートだと話していました」

「デート！」

美香ちゃんとナオちゃんが同時に大声をあげた。

「ちよつとどういうこと？ くわしく聞かせてよ」

というわけで、一週間ぶりに再会したぼくたちの話題は、まずハルナ先生のコイバナから始まったのだった。

「でも、ちよつと安心した」

卓郎君が口を開く。

「クロさんが行方不明になって、ハルナ先生、落ちこんでるんじゃないかって心配してたけど、新しい彼氏ができたんだな」

とたんに、美香ちゃんの表情が険しくなった。となりでうつむくナオちゃんをこっそり指差し、卓郎君に向かって頭を横にふる。

「……あ」

美香ちゃんがなにをいいたかったのか、すぐに卓郎君も気づいたらしい。

ナオちゃんはクロさんの親戚だ。クロさんはぼくたちを怪物の餌食にしようたくらんだとんでもない男だが、伯父と姪の関係であるナオちゃんとしては、クロさんの安否が気になるのは当然だろう。

「ゴメン……」

ナオちゃんに向かって、卓郎君は気まずそうに頭を下げた。

「イヤだ。謝つたりしないですよ」

ナオちゃんが困つたような顔を見せる。

「ナオ、べつになんとも思つてないよ。親戚といつても、一年に一回、顔を合わせるくらいで、つき合ひなんてほとんどなかったんだから」

まゆを八の字にゆがめながら、ナオちゃんは続けた。

「それよりも、オジサンのでいみなを危険な目にあわせちゃったことが申し訳なくて。本当にゴメンなさい」

そういつて、ぺこりと頭を下げる。

「桜田さんの自宅のほうに、クロさんに関する新しい情報などは入っていないのですか？」

ひろし君の問いかけに、ナオちゃんは首を横にふった。

「なんにも。きつと死んじやつたんだと思う」

だれもなにも答えようとしないので、ナオちゃんはさらに言葉をつむいだ。

「みんなも見たでしょ？ 地面から五メートル以上も高いところにある吊り橋から落ちたんだもん。助かるわけないよ」

たぶん、だれもがそう思っていただろう。だけど、口にはできなかつた。目の前で人が死んだなんて……たとえそれが悪人だつたとしても、現実であつてほしくはない。

一瞬、気まずい雰囲気に含まれた店内だつたが、

「あああつ！」

たけし君のさけび声ですべてはもとにもどつた。

「なんだよ、いきなり。びつくりして心臓が止まるかと思つたじゃねえか」

「それ行け！ 街角探検隊」の始まる時間だよ」

たけし君はテレビのリモコンを手にとると、チャンネルを変えた。画面にふたり組のお笑い芸人「がんばるんば」が映し出される。

「よかつた、間に合つた」

胸をなで下ろしながら、たけし君はカウンター前に進んだ。

「あとでもう一度ゆっくり観たいから、録画もしておかなくちや」

テレビの下に設置されたハードディスクレコーダーの録音ボタンをおし、ほっとした表情でイスに座る。

「それ行け！ 街角探検隊」は地元ケーブルテレビで放送されている十五分のローカル番組だ。

この町周辺の観光スポットをお笑いコンビ「がんばるんば」が面白おかしく紹介してくれる。お父さんがいつも観ている番組なので、ぼくもよく知っていた。

「オレ、「がんばるんば」の大ファンだからさ、この番組はいつも欠かさず観てるんだ」

「ああ、このコンビ、最近よくテレビに出てるけど、面白いよな」
卓郎君もうなずく。

「がんばるんば」はテンポのよいかけあいが進むコントが楽しく、ぼくも大好きだったのでうれしくなった。たけし君や卓郎君と「がんばるんば」の魅力についてとことん語りたけれど、残念ながらぼくの言葉はふたりに届かない。

あーあ。ぼくも人間になることができたらなあ。

テレビに映る「がんばるんば」を観ながら、ぼくはそんなことを考えた。そう——まだこのと

きは、のんきな気分きぶんでいることができたのだ。

まさか、このテレビ番組ばんぐみにぼくたちをおびやかす衝撃しょうげき的な秘密ひみつがかくされていたなんて……このときはまだだれも想像そうぞうすらしていなかった。

4 呪われた遊園地

テレビの中では、〈がんばるんば〉のふたりがいつものように軽快なトークをくり広げていた。地元のかたたちも知らない意外な観光スポットをご紹介するこの番組。今夜は紅前町にやって来ました』

紅前町はぼくたちの住む町ととなり合っている山沿いの町だ。キャンプ場や海水浴場がある碧奥町よりも近いが、特産品であるイチゴの畑はなにもないさびれた場所なので、めったに足をふみ入れることはない。ぼくも小さいころに一度だけ、イチゴがりに出かけたことがあったくらいだ。今はイチゴの季節じゃないし、他に観光スポットなんて存在するのだろうか？

『夏休みも終わっていったついうのに、まだまだ暑いですよねえ』

『ホント、暑すぎて困ってます。どこかすずしいところってないですかね？』

ひっそりと静まり返った山林をバックに、〈がんばるんば〉のふたりがしゃべり始める。

『そんなあなたのためにオススメのスポットを見つけってきました。夏の暑さが一気にふき飛びますよ。というわけで、やって来たのはここ！』

テレビカメラが横方向に移動する。ツツコミ担当の背の高い芸人さんが示した先には、アーチ形の大きな入退場門があった。入退場門の上部には〈まほろば遊園地〉と記されている。

「……まほろば遊園地？」

不思議そうな表情を見せたのは卓郎君だった。

「紅前町に遊園地なんてあったっけ？」

「紅前町に遊園地なんてあったっけ？」

卓郎君と同じタイミングでボケ担当の太った芸人さんが首をひねる。

『おまえが知らないのも無理はない。この遊園地、二十年前に閉園しちゃったからねえ。それから二十年間、ずっと放置されたままなんです。ご覧のとおり、看板もまだ残っております』

『馬の絵がかいてあるけど』

『馬じゃなくてロバ！ この遊園地のイメージキャラクター〈マホロバちゃん〉だよ』

なるほど。遊園地の名前である〈まほろば〉とかけているからロバなんだな。ぼくも馬だとばかり思っていた。馬とロバのちがいつてよくわからない。今度、ひろし君の通う小学校の図書室に連れていってもらったら調べてみることにしよう。

『まほろば遊園地がオープンしたのは二十五年前。それからわずか五年で閉園しちゃいました』

『オープンして五年でつぶれちゃうなんて、よっぽど人気のない遊園地だったんですなあ』
『それがそんなこともないんです。当時、この遊園地によく遊びにいらしてたかたにお話をうかがったところ、人気のアトラクションは平日でも二時間待ちになるくらいの大盛況ぶりだったか』

『えええ？ それなのにつぶれちゃったんですか？ どうして？』

『実は二十年前、ここで不気味な事件が起こりました』

ノッポな芸人さんの声がいきなり低くなつた。気味の悪いBGMまで流れ始め、背中あたりがぞぞつと冷たくなる。

『不気味な事件？ それっておまえの顔より不気味なのか？ うわあ、だったら聞きたくない、聞きたくない』

『不気味な顔って……面白い顔のおまえにいわれたくないわ』

『不気味よりも面白いほうがよくなっていくくない？』

『そのしゃべりかた、むかつくからやめてもらつていいですか？』

『えええ？ こんなふうにしやべつたつてよくなっていくくない？』

『やめろおつ！』

みんながふふつと笑う。ぼくも思わずにんまりしてしまった。笑っていないのはひろし君だけだ。

いけない、いけない。

ぼくはあわてて真顔にもどった。人間の言葉を理解しているとみんなに知られたら、いろいろと厄介だ。大きわぎになつて、見世物みたいにあつかわれたくはない。この秘密は絶対に知られてはならなかった。とはいえ、ひろし君はうすうす感づいていてるみたいだけど。

『よくなるくない？ つて、それ、MANZAI グランプリの予選で見事にスベツたネタじゃないか』

『二回戦までは進むことができたんだからよくなるくない？』

『だからやめろつてば』

ノッポな芸人さんはテレビカメラのほうに向きなおると、せきばらいをひとつして、再びしゃべり始めた。

『すみません。話が少々脱線してしまいました。実はこの遊園地、二十年前のある日、訪れていた客や従業員たちがいつせに行方不明になるといふ事件が起こっているんです』

「え——」

声をもらったのは卓郎君だった。美香ちゃんもたけし君も不安そうにまゆをひそめている。無理もない。もしぼくにまゆ毛があつたなら、みんなと同じような表情をうかべていただろう。ひろし君みたいにクールではいられなかつた。

二十年前に起こつた失踪事件。似たような話をぼくたちは知っていた。ハルナ先生の出身校——碧奥小学校でも二十年前、十人以上の子供たちが行方不明になっている。子供たちは今も見つからないままで。

警察の必死の捜索にもかかわらず、事件は解決しなかつた。だけど、ぼくたちは二十年前にながら起こつたかを知っている。

それはすべて、ブルーベリー色の怪物のしわざだった。行方不明になつた子供たちは全員、そいつに食べられてしまつたのだ。

怪物の正体は、当時小学校で飼育されていたウサギだった。青い虫を食べたことで、ウサギはおそろしい怪物に変貌した。同じようなことが〈まほろば遊園地〉でも起こつたのでは……なんて、さすがに考えすぎだろうか？

『たった一日の間に二十名近くのかたが行方不明となつたため、遊園地は営業をいったん停止——そのまま再開されることはありませんでした』

『え？ え？ どういうこと？ その人たちはどうなっちゃったわけ？』

『残念ながら今も消息はわかっていません。近所の住民たちは〈呪われた遊園地〉とおそれ、このあたりにはだれも近づかなくなつたそうです』

『うわあ、おそろしい。我々も早く立ち去つたほうがいいんじゃないですか？』

『なにいつてるんですか？ 今からこの中へ入るんですよ』

『……へ？ おまえバカなの？』

『だって、ずすしくなりたいていつたでしょう？ ではみなさん、こいつを連れていつてくだ
さい』

ツツコミ担当のノツポな芸人さんの指示で、ポケ担当のぼつちやり芸人さんはスタッフたち
がうちりとうでをつかまれ、そのままゲートの向こう側へと引きずられていつてしまった。

『お、おい、ちよつと待て。え？ なに？ マジで中に入るの？ 勝手に入つたらおこられる
て』

ぼつちやりさんは本気であせりまくっている。

『管理会社の許可は取つてあるのでご心配なく』

笑いながらノツポな芸人さんは答えた。

『おまえはいっしょに来ないのかよ?』

『私、残念ながら別の仕事が入っておりまして、今夜はこれで失礼しまーす』
カメラの前を立ち去るノツボな芸人さん。

『おい、こらふぎけるな! ちょ、ちよつと……俺、マジでこういうの苦手なんだつてば。お願い、はなして。イヤ……イヤだつてばああつ!』

暗闇の中にぼつちやり芸人さんのさけび声がひびきわたったところでCMに切りかわった。それまで呼吸をするのを忘れていたかのように、みんながいつせいに息をはき出す。

「これつて……偶然だよね?」

美香ちゃんがだれにきくわけでもなく、ぼそりとつぶやいた。

「二十年前、近くの町でたまたま似たような失踪事件が起こった……それだけのことだよね?」

「碧奥小学校の騒動に巻きこまれたあと、僕は二十年前の事件についていろいろと調べてみました」

そう口にしたのはひろし君だった。

「まほろば遊園地」の失踪事件は碧奥小学校の子供たちが失踪した事件の二週間前に起こっています」

「ほら、見ろ。単なる偶然だ。これが同じ日だったら、遊園地の事件も化け物のしわざかと疑うけど、二週間もはなれてるんだから——」

「それがそうともいいきれません」

卓郎君の言葉をさえぎって、ひろし君は続ける。

「まほろば遊園地」の失踪事件のさらに二日前、この地方にたくさんの隕石が落下したとの新聞記事がありました。隕石はとても小さなもので、幸いにも大きな被害はなにもありませんでした。隕石の落下地点にはある共通点がありました」

たけし君がごくりと生唾をのみこむ。

「……共通点？」

「碧奥小学校、青島……どちらも僕たちが怪物と遭遇した場所です。何軒かの民家にも落下したと書いてありました。そのうちのひとつはジェイルハウスだったのではないでしょうか。そして、まほろば遊園地」にも隕石は落下しています」

「隕石ってなんなんだよ？ それが化け物とどう関係してるっていうんだ？」

たけし君が声をあららげた。

「思い出してください。碧奥小学校で飼われていたウサギは、青い虫を食べたことで巨大生物に

変態したのでしたよね？ 碧奥医院で遭遇した、ハルナ先生の同級生の女の子も青い虫を誤飲したことでからだに異変が起こったとカルテに記されていました。食べたら巨人に変態してしまう虫など、僕が知る限り、地球上には存在しません。だとすれば、その青い虫は一体どこからやって来たのでしょうか？」

「もしかして……宇宙から？」

美香ちゃんの言葉にひろし君はうなずいた。

「二十年前に落下した大量の隕石……その隕石に運ばれて、青い虫は地球へとやって来たのかも
しれません」

5

衝撃の映像

ひろし君の言葉はあまりにも突飛すぎて、すぐには信じられなかった。

隕石に運ばれてやって来たという話が本当だとしたら、青い虫は宇宙生物ということになる。まるでSF映画の中のお話みたいだ。

でも、青い巨人だったり、はんぺん型の怪物だったり、ここ数週間でこの世のものとは思えない生き物をたくさん目にしたことも事実だった。もしかしたらという気分にもなってくる。

CMが終わり、〈まほろば遊園地〉内が映し出された。〈がんばるんば〉のひとり、おびえた表情で園内を歩いている。

さびついた建物、こわれたベンチ、雑草でおおわれた広場などが次々と画面に映る。動物の顔が前面にえがかれたゴーカートはどこどころペンキがはがれ、どれもホラーとしか思えぬ様相だ。

「面白いな」

卓郎君がいった。

「こういうところで脱出ゲームとかやったら、きつと盛り上がるんじゃないやねえかな。お客さんもいつぱい来てもうかりそうだ。今度、オジサンに提案してみるか」

オジサンというのは、卓郎君の父親の弟——ぼくのお父さんのことだろう。お父さんは脱出ゲームの企画、運営に関わっている。

「廃園からの脱出……うん、これはいい。絶対に楽しいだろうから人気が出るぞ」

「なにいつてるんだよ。楽しいわけないだろ。もしここで脱出ゲームをやることになっても、オレは絶対に参加しないからね」

たけし君が反対する。いつの間やら、たけし君はテレビからずいぶんとはなれた場所へ移動していた。おぼんをお腹の前に抱え、ガタガタとふるえている。

『うわあつ！』

テレビからへがんばるんばのポケ担当——ぼつちやりさんのさけび声が聞こえた。画面に血まみれの男性がアップで映る。

「ぶぎやつ！」

たけし君は言葉にならない悲鳴をあげた。テレビ番組を観ただけでこれほどこわがれるなんて、逆にうらやましくなってしまう。

血まみれの男性は、古びた洋館の入り口にえがかれたイラストだった。両手でをだらりと垂らし、焦点の合わない目でこちらをにらみつけている。その横には「ゾンビの館へようこそ」と記された看板が立っていた。

『入ってみましょう』

スタッフがぼつちやりさんにそう指示する。

『え？ イヤだよ。こわいじゃん。俺、絶対に行かないからね』

たけし君と似たようなセリフを口にしながらも、じりじりとゾンビの館に近づいていく。さすが芸人さんだ。

懐中電灯の明かりをたよりに、ぼつちやりさんは洋館の中へと足をふみ入れた。自然と、ジェイルハウスを訪れた夜のことを思い出す。たぶん、みんなもそうだったにちがいない。

古びた礼拝堂のような場所にやって来る。

『う、うわっ！』

懐中電灯の明かりに照らされ、たくさんの人影がうかび上がった。みんな死人みたいに顔が青白い。服はポロポロで、いたるところが血で赤く染まっている。目玉が片方なかったり、うでがちぎれた人もいた。人形だとわかっていても不気味だ。どの人形も、今にも動き出しそうなくら

い精巧せいこうに作つくられている。

「……あ」

それまでだまってテレビを観みていたひろし君くんが、わずかに声こえをもらした。なんだろう？ と彼かれの顔かほを見たが、表情ひょうじょうはほとんど変わかっていない。チャーハンを口くちに運びはながら、じっとテレビを見みつめている。

ぼっちやりさんがゾンビの館やかたを無ぶ事に脱出だつしゅつしたところで番組ばんぐみは終おわりをむかえた。

「あの……ひとつ質問しつもんがあるのですが」

ほっとした表情ひょうじょうのたけし君くんに向むかって、ひろし君くんがたずねる。

「この番組ばんぐみはいつ撮影さつえいされたものなのでしょうか？」

「え？ 知るしるわけないだろ。なんでそんなこときくんだよ？」

空からになったお皿さしらをかたづけながら、たけし君くんはくちびるをとがらせた。

「たぶん、三日みっか前まえだと思おもう」

そう答こたえたのはナオちゃんだ。

「冒頭ぼうとうでへがんばるんぼ」がMANZAIマンザイがMANZAIマンザイの話をはなしていたでしょう？ MANZAIマンザイ

グランプリ予選よせんの二回戦にかいせんがあったのは三日みっか前まえだから。もちろん、昨日きのうの撮影さつえいって可能性かのうせいもあるけ

ど、テレビ番組^{ばんぐみ}つて収録^{しゅうろく}したあとに編集^{へんじゅう}作業^{さぎょう}とかもするみたいだし、三日^{みっか}前の夕方^{ゆがた}くらいに撮影^{さつえい}したんじゃないのかなあ」

「ずいぶんとくわしい。ナオちゃんもへがんばるんば」のファンなのだろうか？

「なるほど。だとすると、意外^{いがい}な事実^{じじつ}がうかび上がってますね」

ひろし君^{くん}はあごに手^てをやり、ほんの少し^{すこ}だけ考え^{かんが}こむそぶりを見^みせた。

「……桜田^{さくらだ}さん」

唐突^{たうとつ}に、ナオちゃんの苗字^{ななぢ}を呼^よぶ。

「クロさんに関する情報^{じょうほう}は、本^{ほん}当^{とう}になにも届^{とど}いていないのですか？」

「うん……たぶん。パパもママもずっと心配^{しんぱい}してたし……」

「なんだよ、ひろし。一^{いっ}体^{たい}、どうしたっていうんだ？」

卓郎^{たくろう}君^{くん}がふたりの間^{あいだ}に割^わって入^{はい}った。

「クロさんは生きています」

みんなの視線^{しせん}がいつせいにひろし君^{くん}のほうを向^むいた。

「おまえ、なにいつてるんだ？ 起^おきながら寝^ねぼけてるのか？」

卓郎^{たくろう}君^{くん}のあきれ顔^{がお}を気^きにする様子^{ようす}もなく、ひろし君^{くん}はさらに言葉^{ことば}を重^{かさ}ねた。

「卓郎君は気づきませんでしたか？ 今観た番組にクロさんが映っていたのを」

「え？ どこに？」

美香ちゃんが目をしばたかせた。

「たけし君。今の番組、ハードディスクレコーダーに録画していたのですよね？ 申し訳ありませんが、再生しながら早送りしていただけますでしょうか？」

「あ……うん、いいけど」

なにがなんだかわからないといった顔つきで、たけし君はリモコンを操作した。テレビ画面に再び、〈がんばるんば〉のふたりが映し出される。

「ねえ。オジサンが映ってるってどういうこと？ ナオには全然わからなかったけど——」

「しっ、静かに」

ひろし君は強めの口調でそういうと、真剣なまなざしをテレビに向けた。

〈がんばるんば〉のぼつちやりさんがおそろおそろのゾンビの館に入っていく。懐中電灯の明かりの先に全身血まみれの人形がぼんやりとうかび上がった。

「ここです！」

ひろし君の声を聞いて、たけし君は一時停止ボタンをおした。たくさんの人形が映し出された

ところで、画面が固まる。

「よく見てください」

ひろし君はテレビに近づくと、右から二番目に映っている人形を指差した。ぼくも近づいて確認したかったが、テレビの位置が高すぎてよくわからない。ぴよんぴよんとはねていると、ナオちゃんが抱きかかえてくれた。

どうもありがとう。

お礼の言葉を述べながら、ナオちゃんといっしょにテレビ画面をのぞきこむ。短い髪の毛、日焼けしたはだ、切れ長の目——それは確かにクロさんとよく似ていた。

「たまたまだろ？」

卓郎君が鼻で笑う。

「芸能人のそっくりさんとか、よくテレビで見るじゃねえか。似ている人はいくらでもいるつて。そもそもこれ、人形だろ？」

「いえ、これはクロさん本人です。耳たぶとのどぼとけの形も一致していますから」

それ以上、異議を唱える者はいなかった。ひろし君以外のだれかが同じセリフを口にしたなら、「耳たぶの形なんて覚えてるわけないじゃん」と反論したのだろうか、ひろし君ならからだ

の特徴をすべて記憶していたとしても、全然不思議じゃない。クロさんの髪の毛の本数をいい当てたとしても、とくにおどろかないだろう。

「つまり、クロさんをモデルにした人形が置いてあつたつてことか？」

「おかしいよ、そんなの」

そう口にしたのはナオちゃんだつた。

「まほろば遊園地」は二十年前に閉園したんだよね？ ということは、その人形は二十年以上前のものなんですよ。二十年前、クロさんはまだ子供だよ」

「桜田さん。先ほど、僕は『クロさんは生きています』といったのですよ」

「え……」

ナオちゃんの表情が固まつた。

「もう一度、クロさんをよく見てください。クロさんは軽く両手をにぎっていますよね。たけし君、映像を少しだけ先に進めてもらえますか？」

「あ、ああ」

いわれたとおり、たけし君はリモコンを操作した。映像が動き、カメラがぼつちやりさんのほうに向けられる。

『うわあ。どの人形もホンモノみたいで不気味です』

ぼつちやりさんのおびえた表情を映したあと、カメラはもう一度人形のほうに向けられた。

「停めてください」

ひろし君の指示で画面が停まる。めずらしいことに、ひろし君とたけし君の息はぴったりだった。まるで長年いっしょに働いている映画監督と助手みただ。

「クロさんの手をよく見てください」

いわれたとおり、うでの先を確認する。

ぼくは思わず息をのんだ。みんなの口からもおどろきの声ももれる。

数秒前には軽くにぎられていたはずのクロさんの手が、このときにはまつすぐのびていた。

「ちよつと待てよ。どういうことだ？ これは人形じゃなくて、クロさん本人だっていうのか？」

卓郎君が語気を強める。

「はい、おそらく」

「機械じかけの人形だったってことはないのか？」

「もちろん、その可能性も否定はできません。しかしそうなると、先ほど桜田さんがいったように、二十年前に閉園となった遊園地に今現在のクロさんをかたどった人形が置いてあることに説

明めいがつかなくなります」

めがねのフレームを持ち上げ、ひろし君くんはさらに続つづけた。

「もうひとつ、ほかの人形にんぎょうはうでが一本いっぽん欠かけていたり、服ふくが血ちまみれだったり、見みるからに不ふ気き



味な姿ですが、クロさんはずいぶんと小ぎれいだと思いませんか？」

「……どういうこと？」

「おそらく、クロさんはここでもなにかをおこなっていたのでしょう。突然、テレビ局の人間が入って来たので、あわてて人形の中にまぎれこんだ——そういうことだったのではないかと僕は推測します」

淡々とひろし君は続けた。

「この人がクロさん本人だと疑う理由がさらにもうひとつ。この人の胸もとをよく見てください」ひろし君の指し示した場所に、みんなは顔を寄せた。

……あ。

最初に気づいたのはぼくだった。クロさんは土星の形をしたシルバーのペンダントを首からぶら下げていたのだ。

「このペンダントって……もしかして、さつき話していたハルナ先生のペンダントと同じデザインなの？」

「はい、そうです」

美香ちゃんの質問に、ひろし君はうなずいた。

「おつき合あいをしてひといる人とプラネタリウムに出でかけたとき、おそろいで買かったのだと話はなしていました」

「え？ え？ つまり、なに？ 先生せんせいが今いまデートしてあいている相手はクロさんだつてこと？」

たけし君くんが素すつ頓とん狂きやうな声こゑを出だす。

「ハルナ先生せんせいに確かく認にんすれば、明あきらかにおもい思おもいます」

「だつたら、今いますぐ電でん話わしてみようぜ」

卓たく郎ろう君くんが勢いせいよく立たち上あがつた。

「待まつてよ、卓たく郎ろう。デでーたト中ちゆうなでん話わしたら悪わるいんじやない？」

「なにいつてんだよ！ ハルナ先生せんせいのデでーたト相あ手てがわかれれば、クくロろさんが生いきてることもわわかるかもしんねえだろ？」

「電でん話わをかけましよう。僕ぼくもハルナ先生せんせいに確かく認にんしたいことがあります」

ひろし君くんがいつた。

「確かく認にんしたいこと？」

たけし君くんが首くびをひねる。

「ハルナ先生せんせいのデでーたト相あ手てがクくロさんであるならば、ハルナ先生せんせいはクくロさんの生せい存ぞんを少すくなくとも

数日前すうじつまえに知しっていたことになりました。なぜそれを僕ぼくたちや親族しんぞくである桜田さくらださんにまで秘密ひみつにしていたのかが気きになりますので」

「オジサン……生きてたんだ」

ナオちゃんがぼそりとつぶやいた。その声こゑは小さちいすぎて、たぶんぼくだけにしか聞きこえていなかっただろう。

ナオちゃんの顔かおを見上みあげる。ナオちゃんはとまどっているような、でもどこかほっとしているような、複雑ふくざつな表情ひょうじょうをうかべていた。